

郊外戸建て住宅地における高齢者の地域マネジメント活動への参加障壁に関する研究 - 兵庫県宝塚市の複数の郊外戸建て住宅地におけるソーシャル・キャピタルの測定調査 -

堺市文化観光局観光部観光推進課 石田 純也
大阪大学大学院工学研究科 松本 邦彦
大阪大学大学院工学研究科 澤木 昌典

1. はじめに

我が国では、高齢者の地域社会への参加促進施策が、国や自治体などを中心に行われている。これには、高齢者の健康維持や社会的孤立の防止だけでなく、高齢者が社会で培ってきた経験を地域マネジメントへ活用する、という目的がある。中でも、高齢化が進む郊外戸建て住宅地の多くは、自治会が地域マネジメントの中心を担っているが、活動参加意識の低下や役員の担い手不足などの問題が発生しており、高齢者が地域マネジメント活動により一層参加することに対する期待が大きい。一方で、高齢者の地域マネジメント活動への参加が上手く進んでいない地域もあり、地域ごとの特性や個人のつながりなどを考慮した参加障壁に関する知見の少ないことが、研究課題として挙げられる。

地域活動を促進していくための方策を探る研究として、福島¹⁾は単身高齢者への調査を行い、孤独死の不安を感じている人が、地域活動・ボランティア活動への参加意向が高い傾向にあることを明らかにした。吉村ら²⁾は、郊外住宅団地における交流活動についてその実態と意識を調査し、交流活動に消極的な層の特性を明らかにしている。このように、高齢者の地域活動への参加について研究の蓄積が成されているが、地域マネジメント活動への参加についての研究の蓄積は十分ではなく、参加障壁を取り除くための検討を行うには知見が不足している。これは、高齢者の地域活動に関する研究が、社会的な孤立を防ぐことを目的として行われている事例が多いためである。また、高齢化が進む郊外戸建て住宅地において、居住者の地域マネジメント活動を促進していくためには、そのような地域に住む人の特性や地区ごとの違いの知見を得る必要がある。本研究では、複数の郊外戸建て住宅地を対象としてアンケート調査を行い、地域マネジメント活動への参加状況や意向を尋ねるだけでなく、より定量的な分析をおこなうために地区別のソーシャル・キャピタル(以下、SCと記す)を測定する。

SCの定義は、研究者によって異なる部分があるが、一般的に広く用いられているのは、アメリカの政治学者であるロバート・D・パットナムによって唱えられた『人々の協調活動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる「信頼」「ネットワーク」「規範」といった社会組織の特徴』である³⁾。つまり、パットナムはSCを個人に帰属するものではなく、社会に蓄積されるものとして考えている。さらに、この定義をもとに内閣府が設定したのが、「交流」「信頼」「社会参加」の3つの要素から成るSCの測定指標である⁴⁾。内閣府は、この測定指標を用いて都道府県ごとのSCの比較をするとともに、個人レベルでのSC

指数の分析をおこない、SCと市民活動は互いに他を高めあっていくような関係であるとした。

内閣府の調査は、SCを計測して比較することが主な目的となっているが、SCを分析の道具として活用している研究も蓄積されている。湯沢⁵⁾は、SCを事例ごとに設定した設問から測定し、中心市街地の活性化対策やNPO組織の活動、区画整理事業などとSCの関係を分析している。この研究のように、SCを個人や組織の指標として扱い分析に活用している研究も多い。一方、谷口⁶⁾らは、まちづくり意識とSCの関係について倉敷市の8地区で調査を実施し、SCが高い人はまちづくり施策に対する重要度の認識も高いこと、まちづくり参加活動の参加度より地域に対する誇りや信頼の方が、まちづくり施策に対する重要度との関連が高いことを明らかにした。また、谷口らは、SCを個人と地域の両方で分析し、都心から農村までの多様な8地区のSCを測定して、まちづくり施策に対する重要度などとの比較を行っている。そして、シンボルとなる取り組みの存在や求心性のある都市構造などが、そこに住む人のSCを意識面から醸成し、まちづくり意識をさらに高めていると結論づけている。

本研究では、谷口らの既往研究では十分に迫れていなかった参加障壁の要因について、地域と個人の両面からSCを用いて分析する。また、谷口らが都心から農村までの多様な地区のSC比較を行ったこととは異なり、高齢化が進む郊外戸建て住宅地の地区間の比較でも、SCを上手く比較することができるかの検討を行う。

以上より、地域マネジメント活動への参加障壁をSCによって分析することと、SCによる郊外戸建て住宅の地区間の比較を行うことに本研究の有用性、新規性があると考えられる。本研究は、地域マネジメント活動の促進に向けた新たな視点をもたらすことに資することを目指している。

2. 調査方法

兵庫県宝塚市内の3箇所の郊外戸建て住宅地においてアンケート調査を実施した。調査対象地は、平成22年度の国勢調査にて戸建て住宅に住む人の割合が90%を超えており、高齢化率についてはいずれの地区も30%を超えている地区から選定した。アンケート調査票は、世帯主への回答の依頼文とともに、対象地区内の戸建て住宅の各戸の郵便受けに1部ずつ投函し、同封した返信用封筒による郵送で回収した。配布は、平成25年12月3日から9日までにを行い、平成26年1月7日までに返信があったものを集計して結果に反映している。

表1 アンケート調査票の配布・回収状況

	配布数(部)	回収数(部)	回収率(%)
A地区	519	179	34.5
B地区	305	121	39.7
C地区	266	78	29.3
合計	1,090	378	34.7

3. 調査結果

アンケート調査票の配布・回収状況を表1に示す。アンケート調査の質問項目については、「交流」「信頼」「社会参加」がSCの算出に必要な設問であり、内閣府のSCを測定するために実施したアンケート調査の設問と同じ内容としている。

まず、表2に、SCの構成要素と指標化に用いる設問・数値を、表3に地区別SCの比較を示す。SC総合指数は、C地区、A地区、B地区の順に高いという結果が得られた。また、地域内での結びつきの強さを測るためのボンディング指数、地域外への橋渡しの強さを測るためのブリッジング指数も算出した。ボンディング指数は、C地区、A地区、

表2 SCの構成要素と指標化に用いる設問・数値

構成要素	指標となる設問	指標化に用いる数値
交流	ご近所とのつきあいの程度	「生活面で協力」「日常的に立ち話」を回答した人の割合の合計
	ご近所とのつきあいの人数	「概ね20人以上」「概ね5~19人」を回答した人の割合の合計
	友人・知人とのつきあいの頻度	「毎日~週に数回程度」「週に1回~月に数回程度」を回答した人の割合の合計
	親戚・親類とのつきあいの頻度	
	スポーツ・趣味活動への参加の有無	「活動している」と回答した人の割合
信頼	一般的な人への信頼	「ほとんどの人は信頼できる」と回答した人の割合
	旅先での人への信頼	
社会参加	地縁的な活動への参加の有無	「活動している」と回答した人の割合
	ボランティア団体・NPO団体活動への参加の有無	

表3 地区別SCの比較

地区名		A地区	B地区	C地区	
交流	近所でのつきあい	近所づきあいの程度	-0.21	1.09	-0.88
		近所づきあいの人数	0.52	-1.15	0.63
	社会的な交流	友人・知人とのつきあい	0.24	0.86	-1.10
		親戚・親類とのつきあい	0.57	0.58	-1.15
		スポーツ・趣味活動への参加状況・頻度	1.13	-0.35	-0.78
	交流指数	0.45	0.21	-0.66	
信頼	近所の人々への信頼	-1.14	0.39	0.75	
	友人・知人への信頼	-1.07	0.15	0.92	
	信頼指数	-1.10	0.27	0.83	
社会参加	地縁的な活動への参加状況・頻度	0.96	-1.04	0.08	
	ボランティア・NPO団体活動への参加状況・頻度	-0.59	-0.57	1.15	
	社会参加指数	0.18	-0.80	0.62	
	SC総合指数	-0.16	-0.11	0.27	
ボンディング指数	近所づきあいの程度	-0.21	1.09	-0.88	
	地縁的な活動への参加状況・頻度	0.96	-1.04	0.08	
	ボンディング指数	0.37	0.02	-0.40	
ブリッジング指数	友人・知人とのつきあい	0.24	0.86	-1.10	
	ボランティア・NPO団体活動への参加状況・頻度	-0.59	-0.57	1.15	
	ブリッジング指数	-0.17	0.15	0.03	

B地区の順に高くなり、SC総合指数と同じ順となった。一方、ブリッジング指数では、B地区、C地区、A地区の順に高くなり、B地区が高い結果となった。

次に、個人のSC指数で回答者を分類した結果を示す。SC指数を算出するために、表4のように点数化を行った。そして、各個別指標ごとに相互比較できるよう基準化(平均0、標準偏差1となるように標準化)した上で、3つの要素ごとに単純平均をとったものを、それぞれ交流・信頼・社会参加のSC指数とした。SC指数は、この3つのSC指数の平均を取って算出し、中央値となった-0.04以上をSCの高い集団、-0.04未満をSCの低い集団と分類した。

SC指数と地域マネジメント活動への参加に関連にした設問とのクロス集計の結果を示す。グラフは、数値を小数点第二位で四捨五入し、カイ二乗検定を行った結果も示している。

まず、地域の運営組織に新たに加わるための条件(図1)については、「地縁的な組織が活発に活動すること」「組織

表4 SC指数の構成要素と指標化に用いる設問・数値

構成要素	指標となる設問	指標化に用いる数値
交流	ご近所とのつきあいの程度	「生活面で協力」=2、「日常的に立ち話」=1、「あいさつ程度」=-1、「全くない」=-2
	ご近所とのつきあいの人数	「概ね20人以上」=2、「概ね5~19人」=1、「概ね4人以下」=-1、「全くない」=-2
	友人・知人とのつきあいの頻度	「毎日~週に数回程度」=2、「週に1回~月に数回程度」=1、「月に1回~年に数回程度」=0、「年に1回~数年に1回程度」=-1、「全くない」=-2
	親戚・親類とのつきあいの頻度	
	スポーツ・趣味活動への参加状況	「活動している」=1、「活動していない」=-1
信頼	一般的な人への信頼	「ほとんどの人は信頼できる」=1、「注意するに越したことはない」=-1、「ある程度の人は信頼できるが注意は必要」=0「分からない」=0
	旅先での人への信頼	
社会参加	地縁的な活動への参加の有無	「活動している」=1、「活動していない」=-1
	ボランティア団体・NPO団体活動への参加状況	

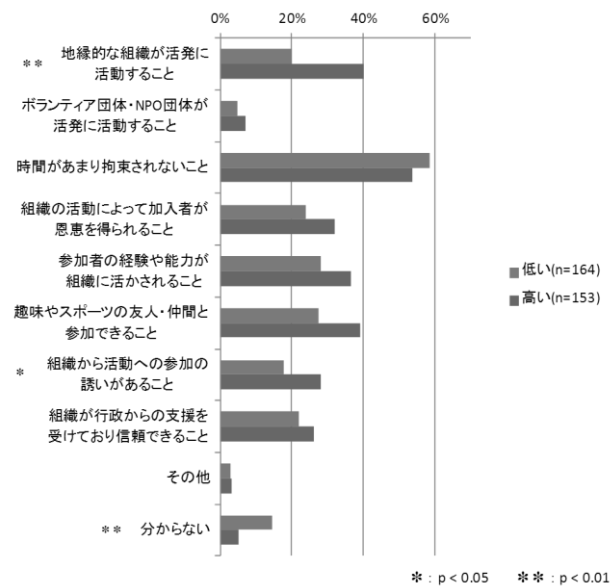


図1 地域の運営組織に新たに加わるための条件

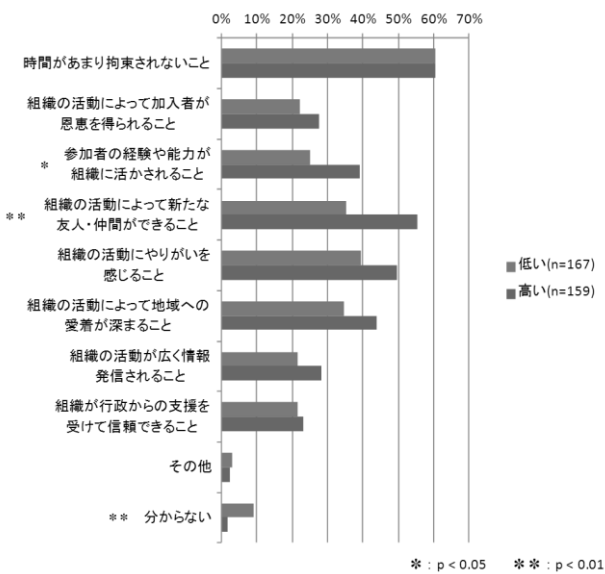


図2 地域の運営組織に継続して関わるための条件

から活動への参加の誘いがあること」と回答した人で、SC 指数の高い人が有意に多くなり、「分からない」と回答した人で、SC 指数の高い人が有意に多い結果となった。また、「分からない」以外では「時間があまり拘束されないこと」のみ、SC 指数の低い人の割合が高い人の割合を上回った。

地域の運営組織に継続して関わるための条件（図2）については、「参加者の経験や能力が組織に活かされること」「組織の活動によって新たな友人・仲間ができること」と回答した人で、SC 指数の高い人の方が有意に多くなり、「分からない」と回答した人で、SC 指数の低い人の方が有意に多い結果となった。また、「時間があまり拘束されないこと」は SC 指数の高い人と低い人での差がほとんど見られなかった。

地縁的な活動への今後の参加意向（図3）については、SC 指数の高い人は参加意向が有意に高く、SC 指数の低い人は参加意向が有意に低いことが分かる。ここで、A の「SC

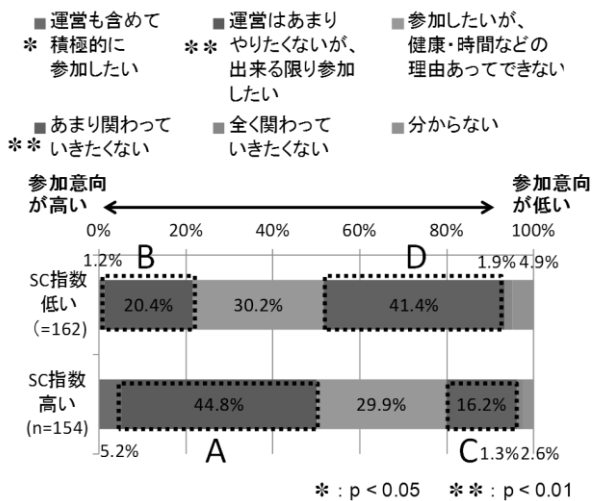


図3 地縁的な活動への今後の参加意向

指数が高く参加意向の高い人」の参加障壁が最も小さく、D の「SC 指数が低く参加意向の低い人」の参加障壁が最も大きいと考えられる。一方、B の「SC 指数が低く参加意向が高い人」、C の「SC 指数が高く参加意向が低い人」は条件を満たせば参加障壁を超えることが比較的容易であると推測される。

先ほどの B と C の集団における、地域の運営組織に新たに加わるための条件（図4）についての結果を示す。B の集団は、「時間があまり拘束されないこと」を特に重視している人が多いことが分かる。さらに、「活動によって加入者が恩恵を得られること」「活動への参加の誘いがあること」への順に期待が大きくなっている。一方、C の集団は「時間があまり拘束されないこと」を重視している人が多く、「友人・仲間と参加できること」「活動への参加の誘いがあること」への順に期待が大きくなっていることが分かる。

B と C の集団における、地域の運営組織に継続して関わるための条件（図5）について結果を示す。B の集団は、「時間があまり拘束されないこと」を特に重視している人が多いことが分かる。さらに、「地域への愛着が深まること」「活動にやりがいを感じること」「新たな友人・仲間ができること」への順に期待が大きくなっている。一方、C の集団は「時間があまり拘束されないこと」「活動にやりがいを感じること」を重視している人が多く、「新たな友人・仲間ができること」「地域への愛着が深まること」「経験や能力が活かされること」への順に期待が大きくなっていることが分かる。

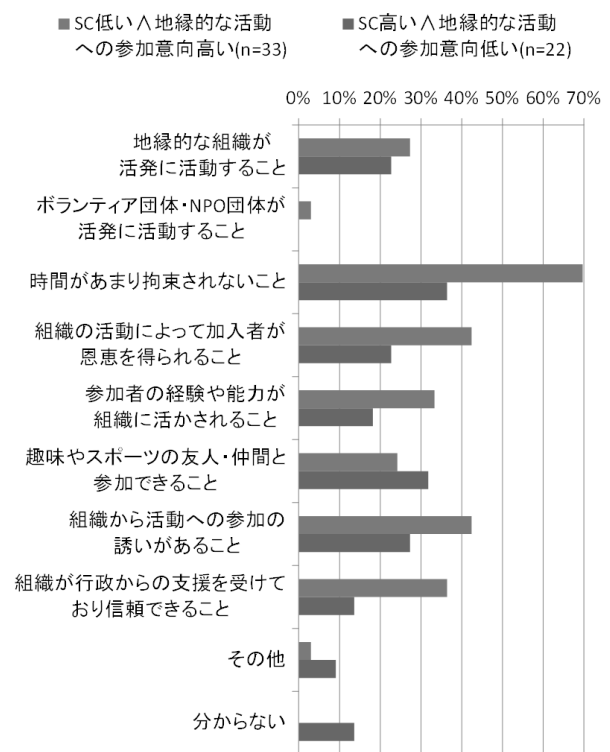


図4 SC 指数と参加意向別の地域の運営組織に新たに加わるための条件

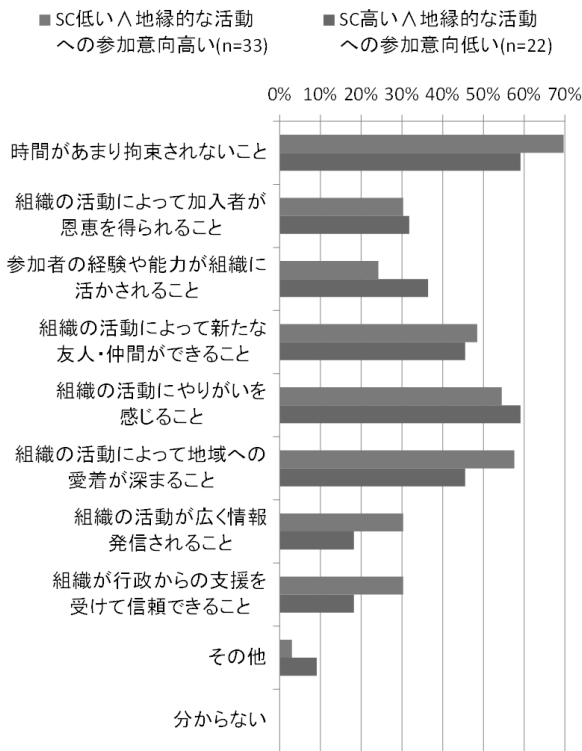


図5 SC 指数と参加意向別の地域の運営組織に継続して参加するための条件

4. 考察

地区と SC 指数の両面から地域マネジメント活動への参加障壁について分析すると、より違いが見られたのは SC 指数による分析であった。SC 指数別の分析では、「SC 指数が低い」「SC 指数が高い」の集団の中から、地縁的な活動への今後の参加意向との関係によって「SC 指数は低い参加意向は高い」「SC 指数は高い参加意向は低い」の2つの集団を取り出し、地域マネジメント活動への参加条件を探るための設問とのクロス集計から参加障壁を比較した。

「SC 指数は低い参加意向は高い」「SC 指数は高い参加意向は低い」とは、それぞれ「地域への貢献意識はあるが社交性が低い」「社交性は高いが地域への貢献意識が低い」集団であると推測できる。前者では、とくに時間の拘束が少ないことが地域マネジメント活動への参加促進において重要であり、さらに、活動参加による恩恵をしっかりと説明して、活動参加への勧誘を積極的に行うことが有効であると示唆された。また、参加を継続してもらうためには、活動で新たに友人や仲間ができることが重要だと分かった。一方、後者でも、時間の拘束が少ないことは重要であるが、友人・仲間と共に参加できる仕組みを整え、活動参加への勧誘を積極的に行うことが有効であると示唆された。また、参加を継続してもらうためには、活動によって時間が拘束されないことが参加時と比較してより重要であることが分かった。なお、前者の方が後者よりも参加条件に関する回答率が高く、これは条件が満たされれば参加率が高まることの証左であると考えられる。これらをまとめた概念図を、

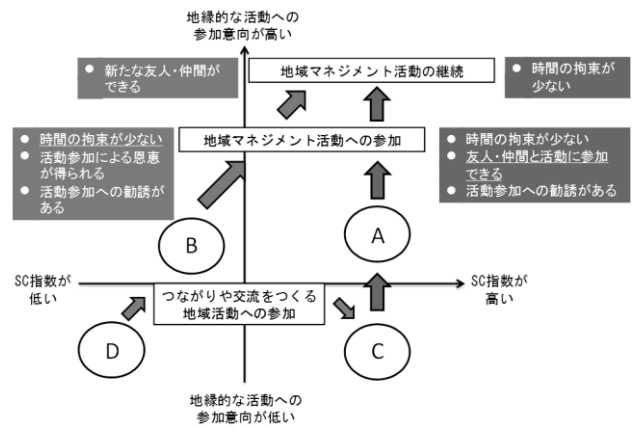


図6 地域マネジメント活動への参加を促進するための概念図

図6に示す。このように、地域マネジメント活動への参加障壁を取り除きやすい層の参加を促進し、組織の活動を活発にしていくことが、手始めとして重要であると考えられる。また、今回の調査では、母集団に占める B と C の割合は合計して 18% 程度であり、既に参加意向が高い A の 22% と合わせると、全体の 40% の参加が見込まれる。なお、D については、直接的な意識変革は難しいので、まずは SC 指数を高めるような地域活動への参加を促進していくことが望ましいと考えられる。

最後に、本研究では十分に検討できなかった点について述べる。本研究では、「SC 指数は低い地縁的な活動に参加意向が高い人」「SC 指数は高い地縁的な活動に参加意向が低い人」が地域の運営組織に新たに加わるための条件をそれぞれ分析したが、ともに「時間に拘束されないこと」が最も高い結果となった。前者の方が後者よりも「時間に拘束されないこと」を参加の条件として挙げている人が多い結果となったが、「1週間や1ヶ月にどのくらいの時間ならば参加できるのか」「自宅からインターネット等で参加することは可能であるか」といったところまでは踏み込めなかった。これらの点を明らかにしていくことが今後の課題であると考えられる。

参考・引用文献

- 1) 福島忍 (2012年) 「単身高齢者の地域活動・ボランティア活動への参加の促進に関する研究」 目白大学総合科学研究, No.8, pp.41-50
- 2) 吉村東、石坂公一 (2012年) 「郊外住宅団地における高齢者の交流活動の特性」 日本建築学会計画系論文集, No.681, pp.2603-2610
- 3) ロバート・D・バットナム (2001年) 「哲学する民主主義-伝統と改革の市民的構造」 NTT 出版
- 4) 内閣府国民生活局 (2003年) 「ソーシャル・キャピタルへ豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」 国立印刷局
- 5) 湯沢昭 (2011年) 「地域力向上のためのソーシャル・キャピタルの役割に関する一考察」 日本建築学会計画系論文集, No.666, pp.1423-1432
- 6) 谷口守、松中亮治、芝池綾 (2008年) 「ソーシャル・キャピタル形成とまちづくり意識の関連」 土木計画学研究・論文集, No.25, pp.311-318